演習問題集6年上第5回・くわしい解説

目次

すぐる学習会
https://www.suguru.jp

ステップ①　$\boxed{1}$

(1)　１人 12 枚ずつ　→　30 枚不足
　　１人 10 枚ずつ　→　８ 枚不足

「30 枚不足」と「８枚不足」は，30－8＝22(枚)ちがいです。

１人あたり，12－10＝2(枚)ずつちがうのですから，22÷2＝11(人)います。

11 人に１人 12 枚ずつ配るには 30 枚不足しているのですから，クッキーの枚数は，12×11－30＝102(枚)です。

または，11 人に１人 10 枚ずつ配るには８枚不足しているのですから，クッキーの枚数は，10×11－8＝102(枚)　でもＯＫです。

(2)　鉛筆を８本と消しゴムを２個買うには，500 円持っていても 30 円たりません。
500 円では買えずに，あと 30 円必要ですから，500＋30＝530(円)でぴったり買えます。

また，鉛筆を６本と消しゴムを３個買うには，500 円で５円あまります。
500 円を全部使わなくても買えたのですから，500－5＝495(円)でぴったり買えます。

鉛筆８本＋消しゴム２個＝530 円　…（ア）
鉛筆６本＋消しゴム３個＝495 円　…（イ）

消しゴム１個の値段を求めるには，鉛筆の本数をそろえます。
８と６の最小公倍数は 24 ですから，(ア)の式を　24÷8＝3(倍)して，(イ)の式を24÷6＝4(倍)します。このとき，消しゴムの個数も，値段もすべて，(ア)なら３倍，(イ)なら４倍する必要があります。

鉛筆 24 本＋消しゴム　６個＝1590 円　…（ア×３）
鉛筆 24 本＋消しゴム 12 個＝1980 円　…（イ×４）

（ア×３)の式と(イ×４)の式をくらべると，消しゴム　12－6＝6(個)ぶんが，1980－1590＝390(円)にあたることがわかります。

消しゴム１個の値段は，390÷6＝65(円)です。

(次のページへ)

(3)　この数の列は，2ずつ増える等差数列です。

等差数列のＮ番目は，「はじめ＋増える数×(Ｎ－１)」の公式で求めることができます。

54番目は，27＋2×(54－1)＝27＋2×53＝27＋106＝133です。

また，はじめからＮ番目までの数の和は，「(はじめ＋おわり)×Ｎ÷２」の公式で求めることができます。

はじめから54番目までの和は，おわりの数である54番目の数が133であることがわかったので，(27＋133)×54÷2＝160×54÷2＝4320です。

(4)　次のことがらを知っておくとラクですよ！

「七五三」 … 7月7日と5月5日と3月3日は同じ曜日になる。

4月4日，6月6日，8月8日，10月10日，12月12日，7月11日(セブンイレブン)， 11月7日(イレブンセブン)，5月9日(ゴックン)，9月5日(クウゴ)， 3月14日(ホワイトデー)は，すべて同じ曜日になる。

この問題の場合，5月5日は水曜日なので，7月7日も水曜日です。
7月7日が水曜日なら，7月14日，7月21日，7月28日も水曜日です。
7月29日は木曜日，7月30日は金曜日，7月31日は土曜日になります。

別解　5月5日から7月31日まで，何日間あるかを求めます。

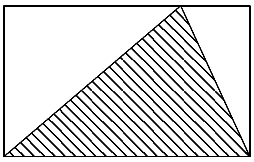
5月5日から5月31日までは，31－5＋1＝27(日間)，
6月は1日から30日までの30日間，
7月は1日から31日までの31日間です。

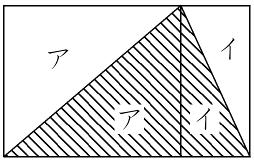
全部で，27＋30＋31＝88(日間)です。

1週間は7日間ですから，88÷7＝12 あまり 4 により，12週間と，あと4日間あまります。

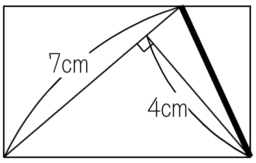
1週間は，この問題の場合は(5月5日の)水曜日から始まるので，
「水木金土日月火」のセットが12セットと，あと4日間のあまりは，「水木金土」ですから，7月31日は土曜日になります。

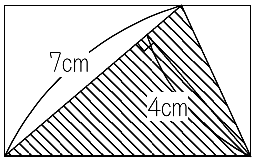
(次のページへ)

(5)  の斜線部分の三角形の面積は，長方形の面積の半分であることをおぼえておきましょう。

なぜ半分になるかというと， 

と分けると，アとア，イとイは同じ面積だからです。

よって， 

のように補助線を引くと， 

の斜線の部分の三角形は，底辺が７cmで高さが４cmですから，面積は $7\times4\div2=14$ (cm^2)です。

斜線部分の面積が長方形の面積の半分ですから，長方形の面積は，$14\times2=$ 28 (cm^2)です。

(6)　Ａは，０分のときは18cm，30分のときは８cmです。

Ａは30分で $18-8=10$ (cm)燃えるのですから，「30分」も「10cm」も10でわると，３分で１cm燃えることがわかります。

Ａは，はじめ18cmでした。３分で１cmずつ燃えるのですから，燃えつきるのに，$3\times18=54$ (分)かかります。
グラフのアは，54 であることがわかりました。

Ｂは30分のときは８cm，90分のときは０cmです。

Ｂは $90-30=60$ (分)で８cm燃えるのですから，「60分」も「８cm」も４でわると，15分で２cm燃えることがわかります。

Ｂは90分で燃えつきました。90分は15分の $90\div15=6$ (倍)ですから，$2\times6=12$ (cm)燃えて燃えつきたのですから，Ｂのはじめの長さは12cmです。

グラフのイは，12 であることがわかりました。

ステップ①　2

(1)　大人２人 ＋ 子ども５人＝5600 円 …（ア）

上の(ア)の式には，大人も子どももふくまれています。

問題に書いてある通り，大人１人は子ども１人よりも 700 円高いです。

ですから，大人１人を子ども１人にかえると，700 円安くなります。

(ア)の式には，「大人２人」とあります。大人２人を子ども２人にかえると，700×２＝ 1400(円)安くなります。

大人２人　＋ 子ども５人＝5600 円 …（ア）
↓
子ども２人　＋ 子ども５人＝5600－1400＝ 4200(円) …（イ）

(イ)の式は，4200 円が，子ども ２+５＝７(人)にあたることを表しています。

子ども１人の入館料は，4200÷7＝ 600(円)です。

(2)　(1)で，子ども１人の入館料は 600 円であることがわかりました。

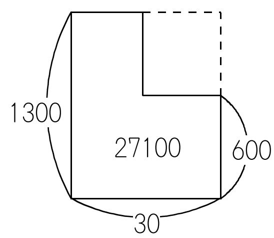
大人１人は子ども１人よりも 700 円高いのですから，大人１人の入館料は，600＋700＝ 1300(円)です。

大人と子どもあわせて 30 人が入館すると，２割引きになって 21680 円になるそうです。

２割引きというのは，１－0.2＝ 0.8(倍)になることですから，もし２割引にならなかったとしたら，21680÷0.8＝ 27100(円)です。

整理すると　1 人 1300 円と 1 人 600 円の人が全部で 30 人いて，27100 円になる。

という，つるかめ算になります。



右の面積図で，点線部分の面積は 1300×30－27100＝ 11900，点線部分のたては 1300－600＝ 700，横は 11900÷700＝ 17 ですから，子どもは 17 人いることがわかりました。

ステップ① $\boxed{3}$

(1)　Ｎ角形の内角の和は，180×(Ｎ－２)で求められます。

九角形の内角の和は，180×(9－2)＝1260(度)です。

よって，正九角形の１つの内角は，1260÷9＝140(度)です。

$\boxed{\text{別解}}$　「外角の和は必ず360度」を利用しても(利用した方がラクに)，求められます。

正九角形の１つの外角は，360÷9＝40(度)です。

１つの内角と１つの外角の和は180度ですから，１つの内角は，180－40＝140(度)です。

(2)　１つの内角は，(1)で求めた通り140度です。

よって，問題に書いてある図の９個のおうぎ形は，どれも中心角は 180－140＝40(度)です。

$\frac{40}{360}=\frac{1}{9}$ ですから，どのおうぎ形も，円の $\frac{1}{9}$ です。

もっとも大きいおうぎ形の半径は９cmです。

正九角形の１辺は１cmですから，次に大きいおうぎ形の半径は 9－1＝８(cm)です。

次の半径は７cm，次は６cm，…となり，もっとも小さいおうぎ形の半径は１cmです。

よって，点Ｑが動いたあとの線の長さは，

$$9\times2\times3.14\times\frac{1}{9}+8\times2\times3.14\times\frac{1}{9}+\cdots+1\times2\times3.14\times\frac{1}{9}$$

$$=(9+8+\cdots+1)\times2\times3.14\times\frac{1}{9}$$

$$=45\times2\times3.14\times\frac{1}{9}$$

$$=10\times3.14$$

$$=31.4\ (\text{cm})$$

ステップ①$\boxed{4}$

(1)　Ａには 12 cmまで水が入っているので，Ａに入っている水の体積は，
$5\times5\times12=300$ (cm^3)です。

Ｂには 3 cmまで水が入っているので，Ｂに入っている水の体積は，
$10\times10\div2\times3=150$ (cm^3)です。

Ａの水を全部Ｂに移すと，Ｂの水は，$150+300=450$ (cm^3)になります。

Ｂの底面積は $10\times10\div2=50$ (cm^2)ですから，Ｂの水の深さは，$450\div50=9$ (cm)になります。

(2)　(1)で，全部の水の体積は 450 cm^{3}であることがわかっています。

また，Ａの底面積は $5\times5=25$ (cm^2)，Ｂの底面積は $10\times10\div2=50$ (cm^2)です。

いま，ＡとＢの水の深さが同じになるように水を入れました。

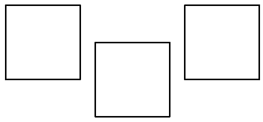
ＡもＢも□cmの水の深さになったとすると，Ａの水は $25\times□$，Ｂの水は $50\times□$ で，合わせて 450 cm^{3}になりますから，$25\times□+50\times□=450$ です。

$(25+50)\times□=450$ ですから，$75\times□=450$ となり，$□=450\div75=6$ (cm)です。

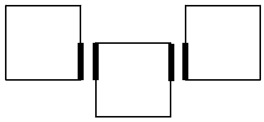
ステップ① $\boxed{5}$

(1)　1枚の正方形の周囲の長さは，2×4＝8(cm)です。

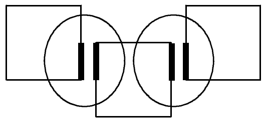
ですから，3枚の正方形を，右の図のように間をあけて並べたとしたら，周囲の長さの合計は，8×3＝24(cm)です。



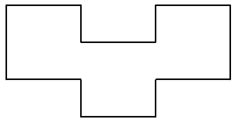
くっつけると，右の図の太線部分は，「周囲の長さ」ではなくなります。



「周囲の長さ」でなくなるのは，1か所あたり2cmで，2か所あるので，2×2＝4(cm)がなくなるわけです。



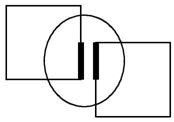
よって，3枚の正方形を右の図のようにくっつけた場合の周囲の長さは，24－4＝20(cm)です。



(2)　1枚のときは，周囲の長さは8cmです。

2枚のときは，くっつけない場合の周囲の長さの合計は8×2＝16(cm)です。

くっつけると，右の図の太線の部分が「周囲の長さ」ではなくなるので，周囲の長さは 16－1×2＝14(cm)です。



1枚のときは8cm，2枚のときは14cmですから，1枚増やすごとに，14－8＝6(cm)ずつ増えます。

ちなみに，3枚のときは(1)で求めた通り20cmですから，2枚から3枚に増えたときも，20－14＝6(cm)増えています。

(3)　1枚のときから周囲の長さを書いていくと，8cm，14cm，20cm，…のように，6cmずつ増える等差数列になっています。

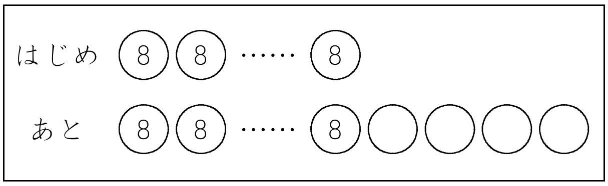
等差数列のN番目は，「はじめ＋増える数×(N－1)」の公式で求めることができます。

8＋6×(N－1)＝140として，140－8＝132　　132÷6＝22　　22＋1＝23ですから，カードを23枚並べたときに，周囲の長さが140cmになります。

ステップ② $\boxed{1}$ (1)

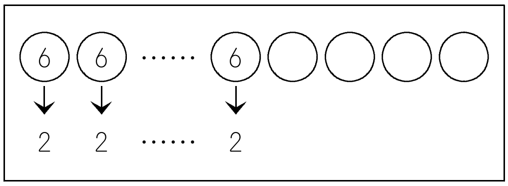
はじめは，８個ずつ玉を持っていました。

４人が加わることになったので，

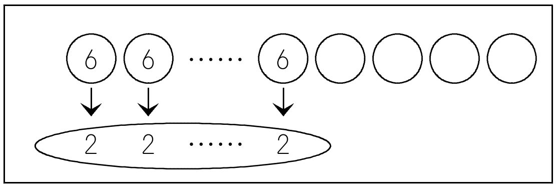


玉を持っている人から２個ずつ集めました。

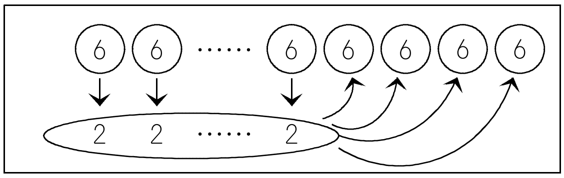
玉を持っている人は，8－2＝６(個)ずつ持っていることになりました。



２個ずつ集めた玉を，

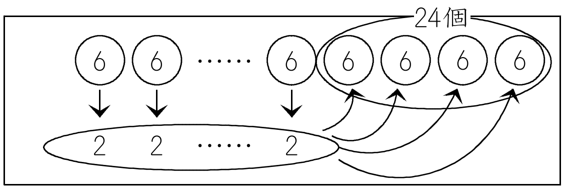


玉を持っていない４人に渡すと，全員が持っている球の個数が同じになりました。

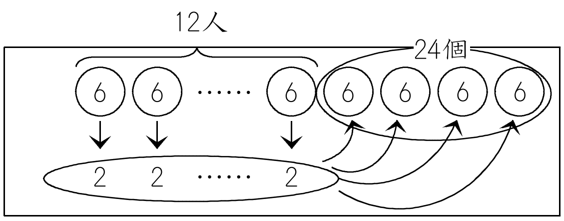


玉を持っていた人は６個ずつ持っているのですから，玉を持っていなかった４人も，６個ずつもらったことになります。

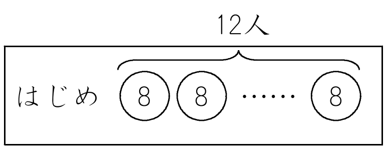
玉を持っていなかった４人は，合わせて６×4＝24(個)を，玉を持っていた人からもらったことになります。



玉を持っていた人から２個ずつもらったのですから，玉を持っていた人は，24÷2＝12(人)いました。



はじめは８個ずつ玉を持っている人が 12 人いたのですから，玉の個数は 8×12＝96(個)です。



ステップ② $\boxed{1}$ (2)

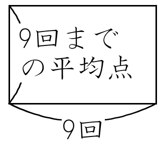
9回目までの平均点は目標点に3点たりませんでした。

10回目までの平均点は目標点に1点たりませんでした。だいぶ目標点に近づきましたね。

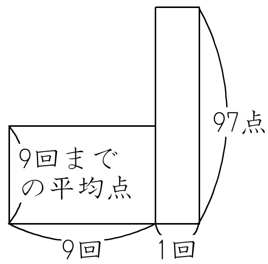
よって，「10回目までの平均点」は，「9回目までの平均点」よりも，3－1＝2(点)高いことになります。…(※)

この問題は面積図を書くことによって解くことができます。

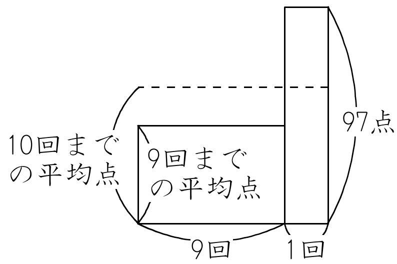
9回目までのようすを右の図のように書き，



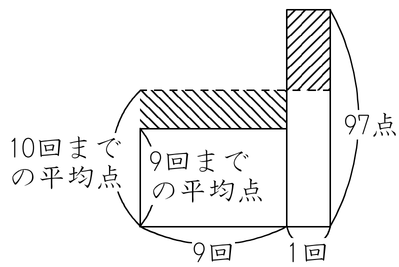
10回目の，たった1回のテストで97点をとったので，



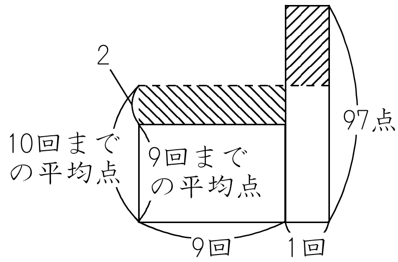
10回までの平均点は右の図の点線のようになり，



点線よりもへこんでいる部分とつき出ている部分は同じ面積になります。

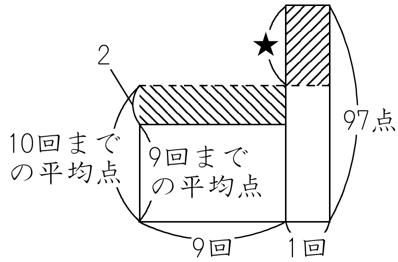


(次のページへ)



（※）でわかったとおり，10 回目までの平均点は，
９回目までの平均点よりも２点高くなっています。

よって，右の図の　の部分の面積は，
2×9＝ 18 です。



　の面積も 18 ですから，右の図の★の部分は，

18÷1＝ 18 です。

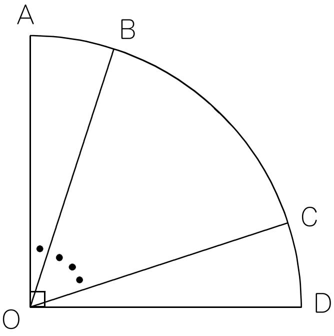
したがって，10 回までの平均点は，97－18＝ 79（点）です。

「10 回の平均点は，目標に１点たりません」と書いてありましたから，79 点は，目標に１点たりない点数です。

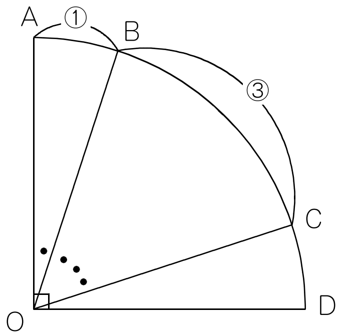
よって目標の点数は，79＋1＝ 80（点）です。

ステップ②　$\boxed{2}$ (1)

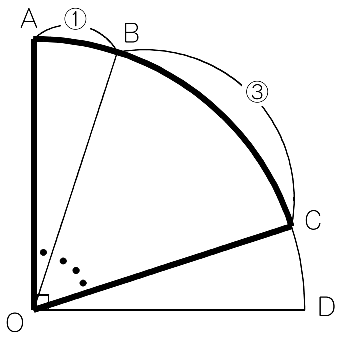
おうぎ形ＯＢＣの面積はおうぎ形ＯＡＢの面積の３倍ですから，中心角も３倍です。

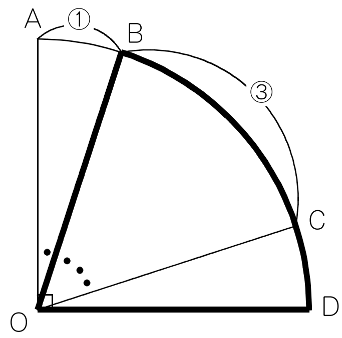


また，弧の長さも３倍です。



おうぎ形ＯＡＣのまわりの長さと，おうぎ形ＯＢＤのまわりの長さは同じです。

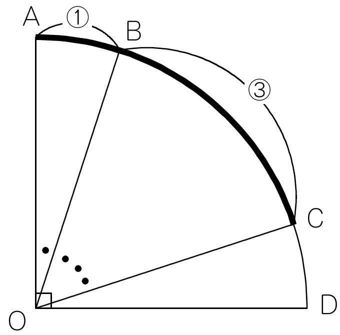


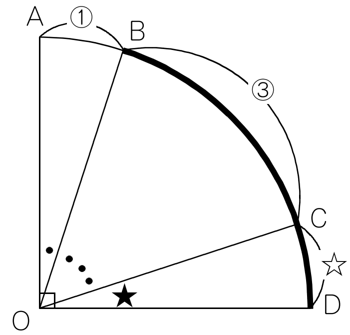


ＯＡ，ＯＣ，ＯＢ，ＯＤは，すべて半径なので同じ長さです。

よって，弧ＡＣと弧ＢＤは同じ長さです。

したがって，右の図の☆は①になり，★の角度は・です。

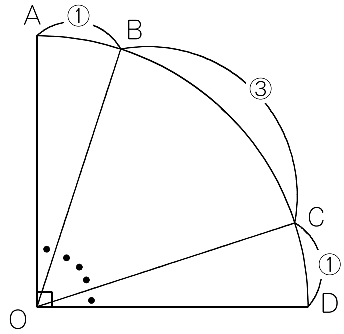


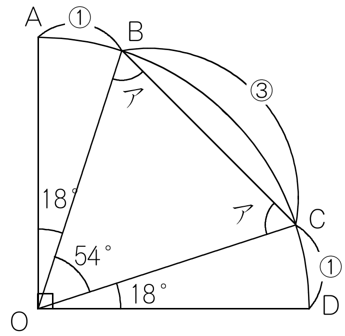


(次のページへ)

右の図のようになり，おうぎ形ＯＡＢやおうぎ形ＯＣＤの中心角は，90÷5＝18(度)です。

おうぎ形ＯＢＣの中心角は，18×3＝54(度)です。





(1)は，角アの大きさを求める問題です。

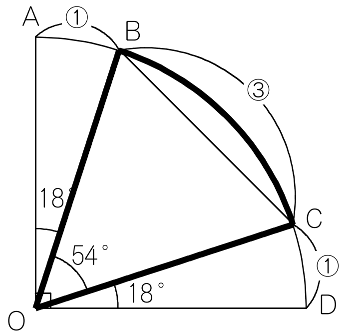
右の図の三角形ＯＢＣは(半径と半径は等しいので)二等辺三角形ですから，角アと角アは等しいです。

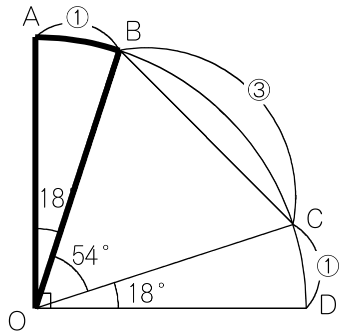
よって角アは，(180－54)÷2＝63(度)です。

ステップ② $\boxed{2}$ (2)

まず(1)の解説を読んでから(2)の解説を読みましょう。

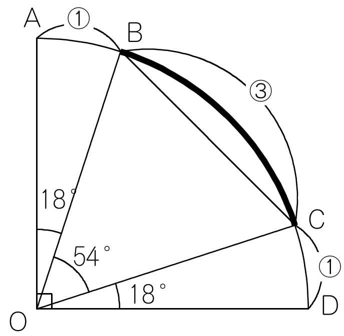
問題によると，おうぎ形ＯＢＣのまわりの長さと，おうぎ形ＯＡＢのまわりの長さの差は3.14cmだそうです。

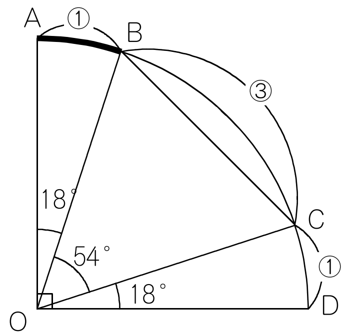




ＯＡ，ＯＢ，ＯＣはすべて半径なので同じ長さです。

よって，弧ＢＣと弧ＡＢの差が3.14cmなので，③－①＝②あたり3.14cmになり，①あたりは，3.14÷2＝1.57(cm)です。





四分円ＯＡＤの弧ＡＤは ①＋③＋①＝⑤にあたるので，1.57×5＝7.85(cm)です。

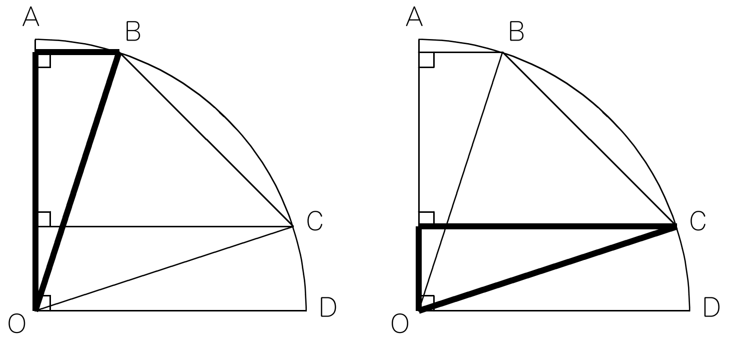
半径×2×3.14×$\frac{1}{4}$＝7.85 ですから，

半径＝7.85×4÷3.14÷2＝31.4÷3.14÷2＝10÷2＝5(cm)です。

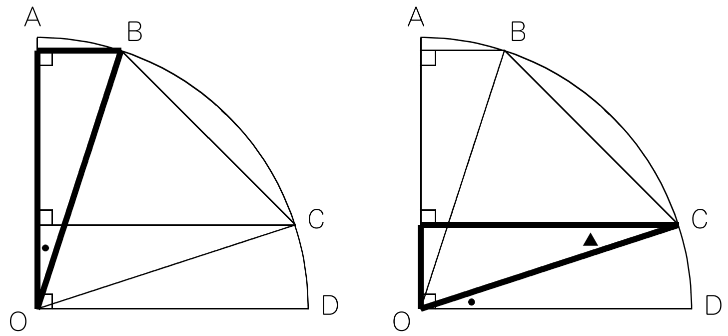
ステップ② $\boxed{2}$ (3)

このような問題では，合同な図形を探せば，問題を解くことができます。

右の図の太線でかこまれた２つの直角三角形は合同です。なぜなら，直角三角形のななめの辺であるＯＢとＯＣは半径なので等しく，

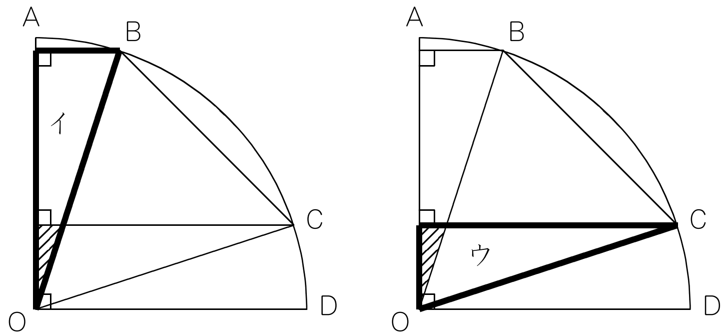


・は 18 度で，▲も・と同じく 18 度だからです。



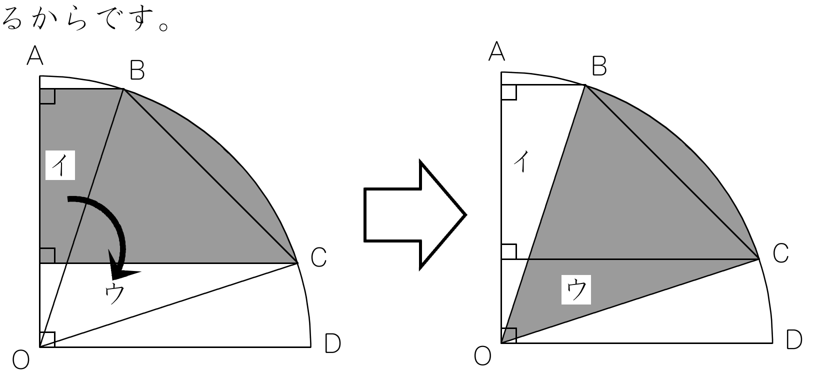
右の図のイとウの部分の面積は同じです。

なぜなら，もし，2つの合同な三角形の面積が 50 cm²で，右の図の斜線部分の面積が 10 cm²としたら，イもウも $50-10=40$ (cm²)になるように，合同な三角形から斜線部分を取りのぞいた残りの部分の面積も等しくなるからです。



イの部分をウの部分に移動させると，おうぎ形ＯＢＣになります。

おうぎ形ＯＢＣの半径は 5 cmで，中心角は 54 度であることがわかっています。



よっておうぎ形ＯＢＣの面積は，$5\times5\times3.14\times\frac{54}{360}=3.75\times3.14=11.775$ (cm²)です。

ステップ②$\boxed{3}$

(1)　おもり１個の体積は，5×5×10＝250(cm³)です。

（図１)では，おもり１個がすべて水中に入っています。

よって水面の高さは，おもり１個の体積ぶんだけ，つまり250cm³だけ増えました。

水面の高さは，おもりを入れる前よりも2.5cm高くなったのですから，
「水そうの底面積×2.5＝250」となります。

水そうの底面積は，250÷2.5＝100(cm²)です。

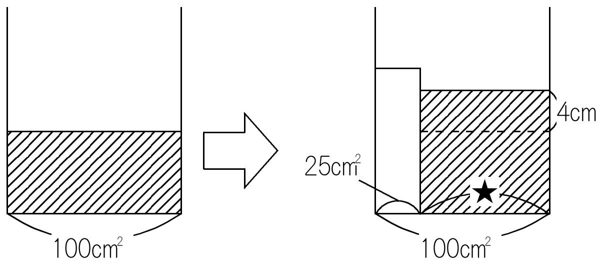
(2)　水そうの底面積は，(1)で求めたとおり100cm²です。

おもりの底面積は，5×5＝25(cm²)です。

このような問題では，おもりが１個入っている状態からもう１個追加するのではなく，おもりが１個も入っていない状態から一気に２個とも入れるようにします。

おもりを１個だけ入れたときは水面が2.5cm高くなり，２個目を入れたときはさらに水面が1.5cm高くなったのですから，おもりが１個も入っていない状態から一気に２個とも入れると，水面は 2.5＋1.5＝4(cm)高くなります。

右の図のようになります。



★の部分の底面積は，100－25＝75(cm²)です。

底面積の比は，100：75＝4：3です。

水面の高さの比は逆比になって，3：4です。

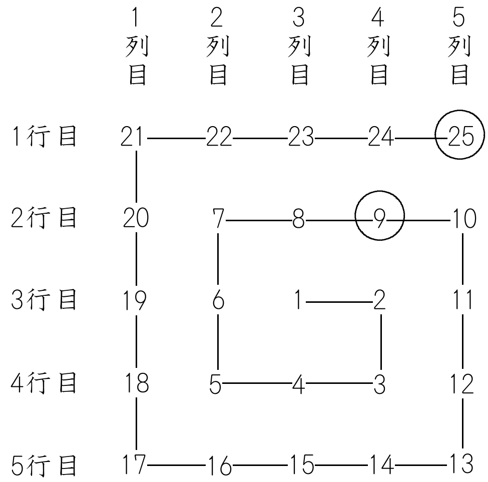
はじめの水面の高さを③，あとの水面の高さを④とすると，4cmが，④－③＝①にあたります。

はじめの水面の高さは③にあたるので，4×3＝12(cm)です。

よって水そうに入っている水の体積は，100×12＝1200(cm³)です。

ステップ② $\boxed{4}$

(1)　行の数が２の図を見ると，最後の数は４になっています。2×2＝４です。
行の数が３の図を見ると，最後の数は９になっています。3×3＝９です。
行の数が４の図を見ると，最後の数は16になっています。4×4＝16です。



同じように考えて，行の数が５の図を書くと，最後の数は 5×5＝25になります。

この図を見ると，１行目の５列目は 5×5＝25ですが，その左下である２行目の４列目は，3×3＝９になっています。５は奇数ですが，３も奇数ですね。(ちなみに，９の左下の数も，1×1＝１になっていますね。)

(1)の問題は，行の数が15でした。
１行目の15列目は，15×15＝225になっていて，その左下の数である２行目の14列目は，13×13＝169になります。

(2)　行の数が４の図を見ましょう。
左下には，4×4＝16がありますね。
右下には，13があります。16よりも，３小さくなっています。
行の数は４ですから，３小さくなっているのですね。(植木算です。)
右上には，10があります。13よりも，３小さくなっています。
左上には，７があります。10よりも，３小さくなっています。

同じように考えると，行の数が20のときは，左下には 20×20＝400があり，
右下には，400よりも19小さい，400－19＝381があり，
右上には，381よりも19小さい，381－19＝362があり，
左上には，362よりも19小さい，362－19＝343があります。

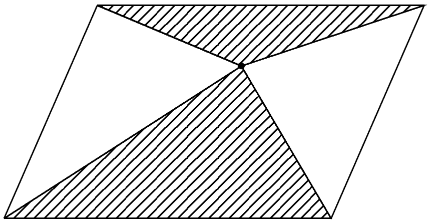
４すみの整数の和は，400＋381＋362＋343＝1486です。

ステップ③ $\boxed{1}$

この問題の説明の前に，次のような問題をやってみます。

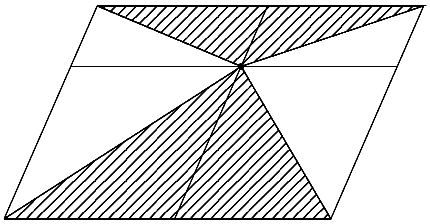
問題

右の図の平行四辺形全体の面積が100 cm²のとき，斜線部分の面積は何cm²ですか。

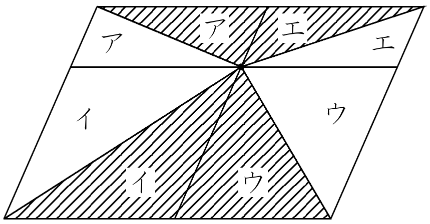


この問題の答えは100 cm²の半分の，100÷2＝50 (cm²)です。

なぜなら，右の図のように分けると，



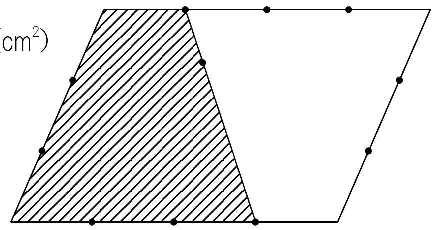
アとア，イとイ，ウとウ，エとエは同じ面積です。



斜線部分は「アイウエ」です。
白い部分も「アイウエ」です。

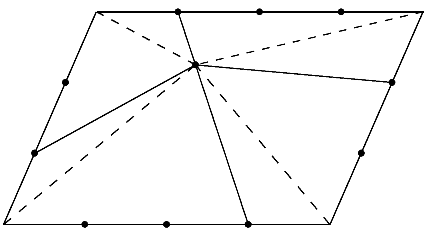
斜線部分と白い部分は同じ面積なので，斜線部分は全体の面積の半分になる，というわけです。

この問題では，右の図の斜線部分の面積は，4＋8＝12 (cm²)です。



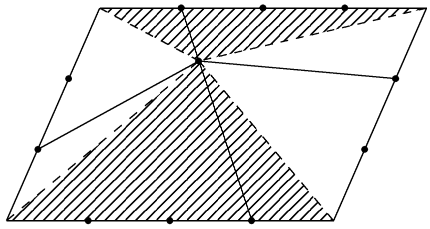
白い部分も斜線部分と合同ですから，全体の面積の半分が12 cm²ということです。

平行四辺形全体を右の図の点線のように分けると，

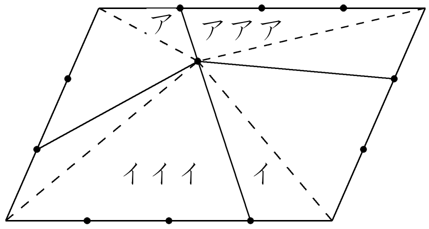


(次のページへ)

右の図の斜線部分も全体の半分なので12 cm^{2}です。



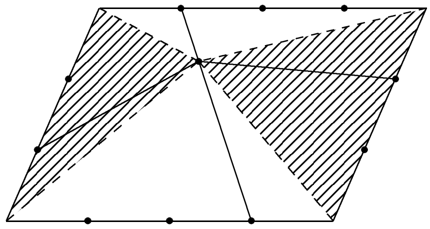
右の図のようにすると，アアアアイイイイ＝12 cm^{2}ですから，12÷4＝3(cm^2)なので，



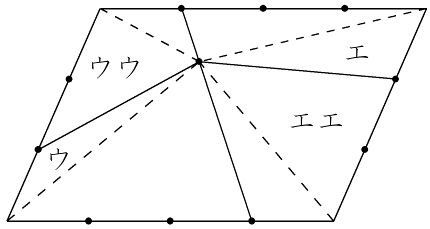
アイ＝3 cm^2

…（※）

右の図の斜線部分も全体の半分なので12 cm^{2}です。



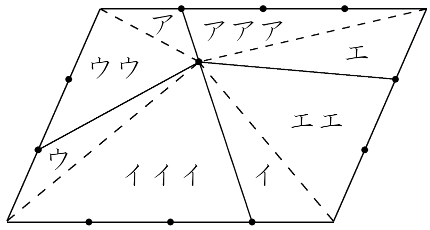
右の図のようにすると，ウウウエエエ＝12 cm^{2}ですから，12÷3＝4(cm^2)なので，



ウエ＝4 cm^2

…（★）

また，問題の図を見ると，



アウウ＝4 cm^2 イイイウ＝8 cm^2

…（☆）

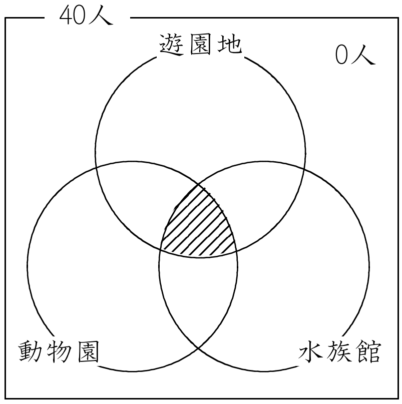
ということもわかります。知りたいのは，「イエエ」の部分の面積です。

「イエエ」にはエが２個あるので，(★)の式を２倍してみると，ウウエエ＝8 cm^2 です。この式と(※)の式とを加えると アイウウエエ＝11 cm^2 です。

「イエエ」を求めるには，「アイウウエエ」のうち「アウウ」がいらないです。
でも，その「アウウ」は，(☆)によって4 cm^{2}であることがわかっています。

したがって，「イエエ」は，11－4＝7(cm^2)です。

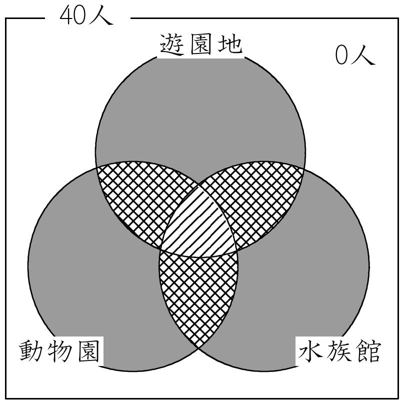
ステップ③ $\boxed{2}$ (1)



右のようなベン図を書いて，問題を解いていきます。

クラスの人数は40人で，必ず3つのうちのどれか1つ以上に賛成しなければならないので，3つの円の外側は0人です。

(1)では，3つすべてに賛成した人数を求めるのですから，右の図の斜線部分の人数を求めることになります。

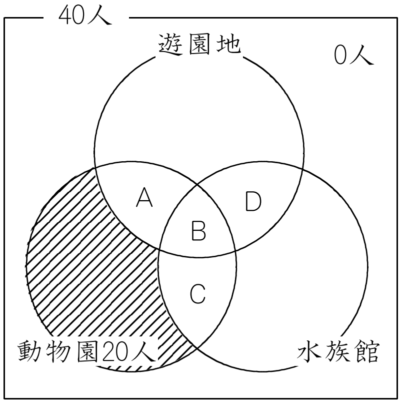


「オ」により，右の図のかげをつけた部分の人数は，27人です。

「エ」により，右の図の網(あみ)目部分の人数は10人です。

よって，3つすべてに賛成した人は，
40－(27＋10)＝3(人)です。

ステップ③ $\boxed{2}$ (2)



(2)は，動物園だけに賛成した人数を求めるのですから，右の図の斜線部分の人数を求めることになります。

「ウ」により，動物園に賛成した人は20人であることがわかっています。

また，右の図のＢの部分は，(1)で３人であることがわかっています。

よって，「Ａ＋Ｃ」がわかれば，答えを求めることができます。

ところで，「エ」によって，「Ａ＋Ｃ＋Ｄ」は10人であることがわかっています。

したがって，Ｄの人数がわかれば「Ａ＋Ｃ」がわかり，Ｂがわかっているので「Ａ＋Ｂ＋Ｃ」もわかって，20－(Ａ＋Ｂ＋Ｃ)の計算によって答えを求めることができる，というスケジュールになります。

では，Ｄをどのように求めるのでしょう。

「カ」で，遊園地と水族館の両方に賛成した人は11人であることがわかっています。

これが，図の「Ｂ＋Ｄ」にあたります。

このあとは，解説を見ないで自分でやってみてくださいね。

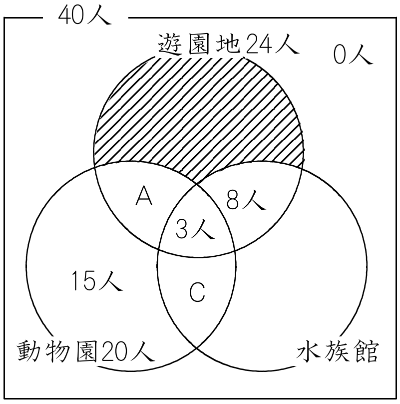
Ｂは３人であることがわかっているので，Ｄは，11－3＝８(人)です。

「Ａ＋Ｃ＋Ｄ」は10人ですから，「Ａ＋Ｃ」は，10－8＝２(人)です。

「Ａ＋Ｂ＋Ｃ」は，2+3＝５(人)です。

したがって斜線部分の人数は，20－5＝15(人)です。

ステップ③ $\boxed{2}$ (3)



(3)は，遊園地だけに賛成した人数を求めるのですから，右の図の斜線部分の人数を求めることになります。

(1)と(2)でわかった人数は，図に書きこんであります。

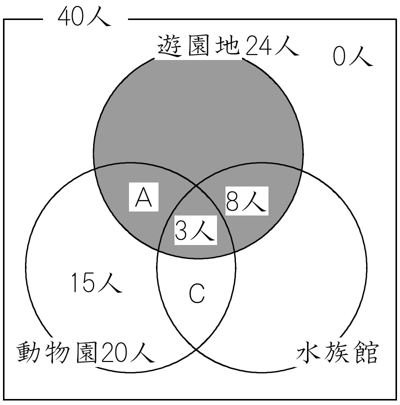
また，「Ａ＋Ｃ」は２人であることもわかっています。

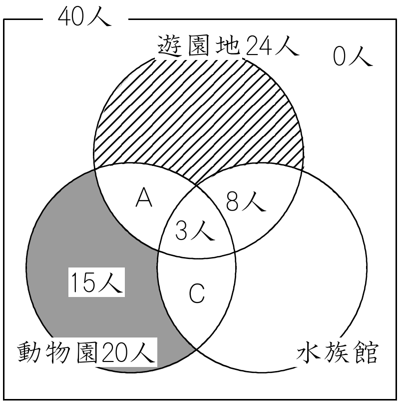
問題の「ア」から「カ」に書いてあることがらで，まだ利用していないのは，「ア」です。

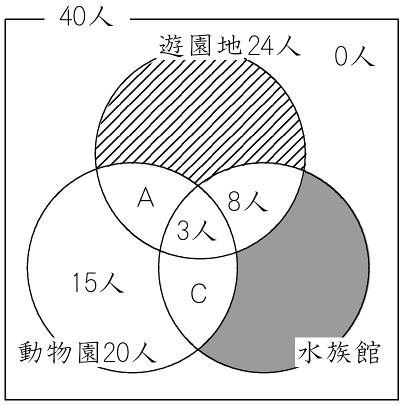
「ア」の文を読んだときに，「だからなに？」と違和感を感じたかも知れません。

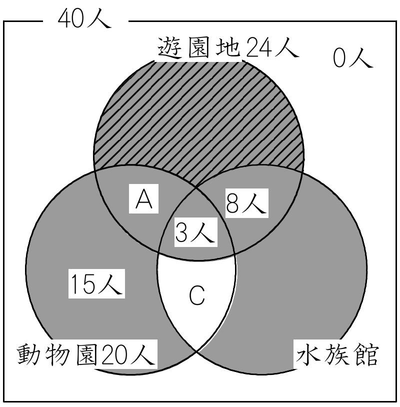
この文で言いたいことは，「水族館だけに賛成した人は，少なくとも1人はいる」ということです。

下の図のように分けて考えると，かげをつけた部分の人数は，左からそれぞれ24人，15人，１人以上です。









合わせると，右の図のかげをつけた部分の人数は，
24＋15＋1＝40(人)以上です。

全部で40人しかいないのですから，かげをつけた部分の人数は40人になり，Ｃの部分は０人です。

「Ａ＋Ｃ」は２人でしたから，Ａは２人になり，遊園地だけに賛成した人(図の斜線部分の人数)は，
24－(2＋3＋8)＝11(人)です。